

★今週の聖句

「わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」

ヨハネによる福音書 15:9

★ねらい

- ・ 8月の第一主日は「平和主日」として守られています。私たちが互いを大切にしようときに、喜びが生まれ、きずなが生まれ、平和が生まれます。

★ ポイント

◎今週のテキストは『平和の主日』として、「世界平和」を共に考えるために選ばれた。「世界平和」を考える場合、一般的には「戦争と平和」のような反対概念として、平和が論じられることが多い。しかしながら、真実の平和は、社会的な概念以前の「内面的平和」でなければならない。宗教の本質は、何よりも「内的平和」そのものにある。そして「内的平和」は、愛からもたらされるものである。

(子供たちと共に、「ほんとうの平和とは何か」を共に考えてみたらいいとおもう。)

◎こうも言える。個々人において、「内的平和」が欠落しているならば、どんなに「世界平和」を叫んでも、何か虚しいものを感じないだろうか!? 「内的平和」は、愛からもたらされる。愛は「すべてを包む」ように、「万人の平和の源泉」である。そして、「内的平和」の源泉、愛は、自覚的な「神とのつながり」そのものにある。源泉・愛は、「神とのつながり」から、こんこんと流れて来る。

(先ず「神さまとのつながり」を感じ、源からの暖かい愛を、子供たちと実感してみよう。)

★ 説教

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているが、  
実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、  
いよいよ豊に実を結ぶように手入れをなさる。」(ヨハネ15:1, 2)

今週のテキストは、ヨハネ福音書15章にある『イエスはまことのぶどうの木』の話の流れので、語られている箇所。万物は有機的な「つながり」の中にある。——が、私たちはこの「つながり」自体に対して、自覚的に生きてはいない。——それは大陸の中の、「陸の孤島状態」にある。実際は、あり得ないことが起こっているのだ。この「孤立状態」こそ、「内的病発生」の始まり……苦しみの始まり。

(宇宙と地球、森と動物たち、海と魚たちのように、具体的なつながりを、子供たちと話し合おう。)

イエスはこの「孤立状態」にあるすべての人に、『有機的なつながり』が既に存在していることに、気づかせているのだ。孤立状態とは、「自己中心的な考えに縛られて、身動きが取れない状態」を意味する。「孤立状態からの解放」は、一重に『有機的なつながり』を思い出し、そのつながりに「ゆだねる」以外にはない。ゆだねた瞬間、「内的平和」が訪れる。放蕩息子を父親が待ち続けるように、神は今ここに、待ち続けていたのだ。いつでもどこでも、神は今ここにいて、帰還を待ち続けておられる。

(子供たちと、どういうときに寂しいか、不安か、その孤立感を共に感じ合ってみよう。)

この「ゆだね」「信頼」によって、「孤立状態」は終わり「内的平和」が訪れる。その瞬間、「生命エネルギーが、つながりの源からみなぎって来る」。そして、この生命エネルギーによって、「豊に実を結ぶように、神は手入れをなさる」のである。もともと、「神と人間のつながり」は、そのように成立していたのだ。——が、いつの間にか、私たちは忘れていた。イエスは、忘れていた私たちの眼を覚ますために、この世に来られた。そして、愛は、「神と人間のつながりの源泉」である。愛は……源泉だ。

(生命エネルギーは、ハートを思い切り開くときに感じるもの。その体験を共にしてみよう。例えば、共に讃美歌をうたう。共に握手する。ともかく、心を開くことは何でも、心身ともに動くことが大切。)

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」

(ヨハネ15:9)

イエスが自分のことを「わたし」と第一人称で呼んでいても、それは私的な「私」ではない。その「わたし」とは、私的な「私」が消えた「わたし」、「神とひとつのわたし」「無自我のわたし」であることに注意。この「わたし」は、「万人と共にいるわたし」「インマヌエルのわたし」である。愛は「すべてを包む」からである。愛とは、「つながりの源」からやって来る『神の働き』のことである。ゆえに、つながりの源からやって来ている、「わたしの愛にとどまりなさい」と、イエスは言っているのだ。

(愛は、頭で考えるものではなく、ハートで感じるもの。子供たちと感受性の次元を体験してみよう。)

「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」(同 11, 12 節)

これが今週のテキストの結論。「喜び」と「笑い」と「涙」は、ハートからやって来る。「明晰さ」もハートからやって来る。「神とのつながり」(「まことのぶどうの木」)からやって来るもの。その源は「神の愛」である。「混乱」は常に、頭(マインド)からやって来るもの。自我からやって来るものだ。「神とのつながり」に目覚め、そのつながりに『ゆだねる』とき、奇跡が起こる。生まれ変わりが起こる。

(子供たちと手をつなぎ合って、ひとつの輪になろう。そして、共に「神とひとつ」を感じ合おう。)

#### ★分級への展開

さんびしよう

\*讃美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

□141番

□108番(改訂版)

## やってみよう

「ほんとうの平和とはなんだろう？」

準備する物：ハート型の紙を人数分×5枚程度用意する。

模造紙

ペンなど筆記用具

1. 今の気持ちをハートの書く  
1つだけではないと思うので、何枚か書く
2. 下の図のように分けた模造紙に喜び・涙・笑い・怒りに分けて貼る

喜び(^o^)	涙(;_)
笑い(*^_^*)	怒り(-_-)

3. どういう時に、そういう気持ちになったか発表する
4. こども讃美歌 かなしいことがあっても
5. どんな気持ちの時も神さまのそばにいて、見守ってくださっていること、見守られていることが平和であるということを伝える

## 話してみよう

- ・「平和って何ですか？」って聞かれたら何とこたえる？
- ・「平和じゃないってどういうことですか？」って聞かれたら何とこたえる？
- ・平和と平和の反対と、それぞれ対応している答えになった？違っていたら何で違ったか考えてみよう

例) 対応 平和は争いがない 平和じゃないは戦争

非対応 平和は日常 平和じゃないは戦争

- ・私の平和と世界の平和は同じ？違う？違うのは何故？
- ・聖書の平和と私の平和、世界の平和は同じ？違う？

★ 今週の聖句

「どんな貪欲にも注意を払い、用心なさい。」

ルカによる福音書 12:15

★ねらい

- ・ 欲望には限りがなく、それが完全に満たされることはありません。しかも、貪欲さは自分自身だけに集中させ、神様や他者に対する意識さえも失わせてしまう危険があります。

★ ポイント

◎今週の聖書のポイントは、『生命と持物』に対する明確な理解を、私たちに考えさせてくれる。「自分の持ち物は何一つない」と考えることは、大変な勇気を必要としている。それこそ、大変な勇気である。しかしながら、その勇気がある者は、「大空を飛ばたく翼を手に入れる」ことができる。私たちが、全ては「神のもの」と気づいたとき、真の自由を得て、大空を飛ばたく。感謝の念が、大空へ。

◎——全ては最初から、「神のもの」であった。肉体は本来、美しい。肉体は、「神の神殿」であるからだ。——しかし、それが美しいのは、「自分が肉体ではない」ことを、知ったときだけである。この肉体を、「自分自身」と同一視すると、それは醜くなる。「神の神殿」ではなく、自らが「監獄」になる。この肉体は、「神さまが宿られるご神体（宮）、神殿なのだ」と悟るとき、初めて神の懐に還る。

◎「私は肉体ではなく、ただの“来客”であり、肉体は“借物”と知れば、そのとき肉体は「神の神殿」「神のいのち」が、宿るご神体」となる。神殿に“美”が、“神聖さ”が、“落ち着き”がある。99.9%の人々が、自分は肉体だと信じている。自分の持ち物だと。「自分の持ち物は何一つない。全ては神さまの所有物。ただ地上にいる間、神さまから借用しているに過ぎない」と知れば、全ての重荷は消える。「真理は、私たちに自由を得させる」（ヨハネ8：32）とイエスは、言い続けている。

（子どもたちと共に、この肉体ばかりか、回り中のもの全てが「神さまの贈り物」体験をしてみよう。）

★ 説教

群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように、兄弟に言ってください。」  
イエスはその人に言われた。『だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。』

（ルカ12：13、14）

イエスは「遺産相続」立会人にされた。イエスは、当事者同士の問題に介入することを、故意に拒絶した。——それは、混乱に巻き込まれる、というより、群衆の一人が、冷静になるためである。混乱の背後にあるものは、一体何なのか！？ 人の“欲望”にある。——貪欲さは、真実が見えなくなっている状態。——執着は、「自分の当然の所有物」という思い込みから生じる。「自分の持ち物は何一つない」とおもうことは、大変な勇気を必要ととしている。冷静になり、謙虚になることからの出発が……第一。

（子供たちと共に、「神さまからの贈り物」について、話し合ってみよう。）

そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心なさい。有り余るほど物を持ってい

でも、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」(ルカ12:15)

人は先ず「神のもの」。先ず「自分の肉体も精神」も、神のものである。そして、「自分の持物」ですら、「神のもの」である。イエスは、単純に「神の決定」を伝えているだけである。「神の決定」に思い当たるように、冷静になるように、気づくように、促している。ここに厳かな「神の決定」がある。「全てのものは神の所有物である」という、真実に。次に、イエスは持物よりも、『いのちの尊さ』に眼を転じている。今ここに来ている『いのちの尊さ』への感謝へと……この命の重さへと……目覚めさせる。

(子供たちと共に、神さまによって与えられた『このいのち』を味わい、噛み締めてみよう)

しかし神は、『愚か者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。

お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。

自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

(同12:20, 21)

「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」(ルカ17:33)。

上の引用のイエスの言葉は、本来「自分の命」は存在しない。「自分の命」だと執着すれば、それにしがみついて、その結果苦しむことになる。しかしながら、「この命は自分のものではない」と悟る者は、執着や苦しみから解放されて、「大空を羽ばたくような自由を得ることができる」と言っている。『生命と持物』は、全て神さまのものである。そのことの認知は、エゴからの解放であり、感謝の根源だ。

(子供たちと共に、この「いのちも持物もみな、神さまからの贈り物」であることを、感じてみよう)

真理はただ、私たちに自由を得させる。「食欲」とは、「神とは何の関わりのない自己追求」のことである。それは人間の妄想である。妄想が消えて、『この自分は何者か』が分かれば、神のみ前に豊かになっている。今や残された問題は、欲望、執着、食欲という『妄想からの解放』である。アーメン。

#### ★分級への展開

さんびしよう

\*讃美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

51番

123番(改訂版)

話してみよう

- ・椎名林檎というミュージシャンの「ありあまる富」という歌を聴いてみよう。
- ・お金と命とどちらが大切?
- ・イエス様は生きるために何が必要(何に注意を払うよう)と言っている?

やってみよう

「自分の物、神様の物？」

1. 大切にしているものを持ってきてもらう
2. それは、いつ、どこで、誰が…等、その物に関する歴史を発表する  
発表が難しいようであれば、下記のようなワークシートに書いてもらう

ぼく、わたしの大切なもの		なまえ _____
たいせつな物の絵を描いてみよう！		
いつ	どこで	
だれに	大切な理由	

買ってもらった？  
プレゼントしてもらった？  
自分で買った等

3. 「自分自身は誰の物だろう？」と聞く  
(お母さんのもの、家族のもの…等の答えが出ると思う)  
全てのものは神様によって作られたこと、神様からの贈り物であることを伝える
4. こども讃美歌 かみさまがつくられた

★ 暗唱聖句

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」

ルカによる福音書 12章 49節

★ねらい

人々の集まりが、一見、争いもなく平和が保たれているように見えても、内実の一部の弱い立場の人が圧迫され、虐げられており、その犠牲のゆえに全体のバランスが保たれていることがある。このような中で、本来のあり方を取り戻そうとすると、大きな痛みを伴うことがあります。

★ ポイント

◎イエスの言葉は、表面的な理解では捉えにくいので、今週のことをよく味わい、自分なりに消化して、子供たちに伝えたい。その場合、教師の持ち前の表現で充分である。このテキストはご参考まで。

◎今週の聖書のポイントは、特に「イエスの弟子」とは何者だろうか、ということ、根本的に理解することにある。「イエスの弟子である」とは、何か特殊なグループに属することではない。——そうではなく、「自分の欲望や執着から解放されて」、「真実に誠実であろう」と自覚する者たちである。師イエスの一生涯は、「真実を生き抜く」そのもの。「真実はひとつ」。——真実に従う者が……弟子。

◎「イエスの弟子」「真実に従う者」は、勇気を必要とする。しかしながら、「真実」と「勇気」は常に、神ご自身からやって来る。「イエスと弟子」は共に、神よりの援護のもとにある。実のところ、「イエスの弟子」とは、「インマヌエルなる神と共に」、「真実に出向く者」。「勇気」も……神から来る。

★ 説教

わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、  
どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。

それが終るまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。

(ルカ 12:49)。

私たちの人生は、「過去」か「未来」かに囚われた人生である。それはちょうど、「バックミラー」(過去)を見ながら自動車を運転しているか、遙か「地平線の彼方」(未来)を見ながら運転しているようなもの。「現在を生きる」ことは……まれにしかない。現在が唯一の現実(リアリティ)であり、今のみが真実である。この今を見よう……私たちは皆、「神と共にある」。このまさに瞬間、「神は私たちの内側に存在し」、同時に「神は私たちの外側に存在する」。——その自覚、気づきが、「過去の囚われ」から「未来の幻想」から、私たちを自由にする。——つまり、「幻想や囚われからの……自由」である。

わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。

イエスは何を言おうとしているのだろうか!? 「地上に火を投ずる」とは!? ——それは、このまさに瞬間、「神は私たちの内側に在り」、同時に「神は私たちの外側にも在る」という現実、

「気づかせよう」としている。私たちの頭は、過去にさ迷い、未来を夢見て生きている……眠り続けている。

「火」とは、眠り続けている私たちを揺り起こす、熱き『神の揺さぶり』。その火は『神の愛の炎』だ。

(神さまの愛は「優しい」と共に、「厳しい」。神さまの愛は、「私たちを成長させる愛」だから。

その辺のことを、子どもたちと話し合ってみたら、とおもいます。)

イエスは、私たちにパワーを注ぐために、この世にやって来た。私たちの内面に松明(たいまつ)を灯(とも)すために、弟子を選んだ。松明とは、「聖霊」のことである。あのバプテスマのヨハネは言う。イエスのことを『その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる』(ルカ 3 : 16 b) と。

ペンテコステ(聖霊降臨日)のとき(使徒言行録 2 : 1 以下)に、「一同が一つに集まっていると、一同は聖霊に満たされた」。「一同が一つに集まる」とき、「全体はひとつ」になる。——そこで初めて全体が一つになる。——人の心が一つになる。おのおの乱れた頭、頭、頭が静まる。それは共通の体験となる。それは無垢である。——私たちが無心になったとき、始めて「神われらと共に在す状態」……一同が全面的な静穏さ……全面的な調和……一つなる境地にいる。歓喜、至福、祝福体験の瞬間である。

イエスは、当時自分と共にいた弟子たちに対して、ジレンマを抱いていた。弟子たちが「その火に既に燃えていたら」ということは、弟子たちがなかなか成長しないことを、憂えている。ゆえに、イエスは「受けねばならない洗礼」があった。——これこそ十字架の道である。苦難の道である。——が、その道が結局は、イエスと共に「私たちをも復活させ」、私たちに「火を投ずる」ペンテコステをもたらした。

あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。

言っておくが、むしろ分裂だ。今から後、一つの家には五人いるならば、

三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。

(同 12 : 51 ~ 53)

ここでイエスが言っているのは、「仲良し集団を超えなければならない」と。——それは職場でも、仲間内でも、家庭でもそうだとする。——それは「個人主義」の強調ではない。そうではない。個人主義を信奉している人は、単にエゴイスト(利己主義者)でしかない。——ちょうどその反対を言っている。『本来のあなたであれ!!』と。言う。「自分」と言う“自我”を落とせ、と。それは、「神と一つ」(「全体と有機的に一つ」)の人。「弟子(disciple)」とは、「訓練(discipline)」の語源から来ている。『真実に誠実な者の訓練』。それは「神への明け渡し」の訓練。「神とひとつ」の訓練だ。ハレルヤ。

(「イエスの弟子」とは、「神の愛によって成長させられる者」であることを、伝えたいです。)

★分級への展開

さんびしよう

\*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

46番

120番（改訂版）

やってみよう

「イエス様の弟子になろう」

今日は2つのゲームをやりましょう。人数によりますが、きっと室内でできるのではないのでしょうか。それぞれのゲームで、指示をするリーダーが必要です。また、リーダー以外は目隠しをしてやると難易度があります。特にゲーム2は動きがあるので、教師の方々は見守りをお願いします。

～ゲーム1～

1. リーダーは前に、子どもたちは散らばって立ちます。
1. リーダーが「イエス様が言いました。座りなさい。」全員座ります。
2. 「ジャンプしなさい。」これは、“イエス様が言いました”とは言っていないので、その場から動きません。
3. “イエス様が言いました”とっていないのに動いたり、リーダーが指示した動きと違うことをやったら抜けましょう。
4. 最後の1人になるまで続けます。

～ゲーム2～

1. おしくらまんじゅうのように、隣の子どもと腕を組み、背中を合わせて円陣を組みます。
2. リーダーが「左」と言ったらみんなで左に、「右」と言ったら右にドドドッと移動します。
3. リーダーは前後左右、左回り、右回り、しゃがむ、ジャンプとみんなを操縦します。

～ゲーム1～では、リーダーの指示をきちんと聞き分け、その言葉を信じて行動する力が必要です。

～ゲーム2～では、リーダーと仲間たちを信じて動かないとできません。説教の終わりにあるように、仲良しで周りに合わせるだけでなく、神さまの言葉に耳を傾け、自信を持ってすすむように伝えたいです。

○こども讚美歌 120 主イエスのみちを

話してみよう

- ・分裂の方がいいことってある？具体的に挙げてみよう。
- ・「形だけの平和」ってあるだろうか？それって良いこと？
- ・イエス様の言う「火」って何だろう？

★今週の聖句

「狭い戸口から入るように努めなさい。」

ルカによる福音書 13:24

★ねらい

- ・ 狭い戸口から入るとは、どのようなことかを理解しましょう。
- ・ 反対に広い戸口から入るとは、どのような生き方かも考えましょう。

★ ポイント

◎私たちには、今、無限の『好機』がやって来ている。それは、「神の国」が近づいてきているからだ。イエスは言う。『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』（マルコ1:15）と。

——が、その好機を、私たちは逃し続けている。このような実情を理解して、『好機』を強調したい。

（『好機』は今にある。「悔い改め（方向転換）」は、今にある。「方向転換」は、『今ここ』への意。）

◎次に、イエスが「神の国到来」を強調するときの「神の国」とは、一体何を意味するだろうか！？

「神の国」とは、「永遠の命」「人間の土台」「生命の源泉」「喜びの源」「エデンの楽園」を意味する。この「生命の源泉」に目覚め、「内面の戸口の扉」を開くとき、「至福の国」「エデンの楽園」に入る。

（イエスの「神の国」は、創世記の「エデンの楽園」の内容を再び、現実の中にもたらす。）

◎その「内面の戸口の扉」を開くのは、常に、今でなければならない。この“今を見る”“今を味わう”。私たちは神さまと離れてはいない。全体とひとつに結ばれている。それを“今感じ”“今をくつろぐ”のだ。くつろいだ瞬間、「全体とひとつに結ばれている・いた」。「喜びの国」「神の国」の中にいる。

（ポイントはもっとリラックスして、喜びにあふれること。）

★ 説教

宇宙はひとつ。神はひとつ。万物は、皆、有機的につながり合っている。が、私たちは、この真実を忘れていて、人々だけ、ばらばら。「孤独の中に」散らばっている。乾涸びたような雑木が、ばらばらに立ちすくんでいる。イエスはこの実情を、憂えている。この「孤立からの解放」が、緊急の課題。

この「孤立した状態」は、私たちが、マインド（思考）の中にはまり込んでいるゆえ、当然の結果である。マインドは「閉じられた牢獄」だ。あらゆる野心や執着を追い求め、「深刻さ」や「苦しみ」を、自らが作り出している。イエスの時代の人々も、今日の人々も、全く同じ轍（てつ）を踏んでいる。

（子供たちと共に、「苦しみの原因」について、一緒に考えてみたい。その原因は「深刻さ」。）

『好機』は今、先ず、私たちは「今よりもっと、ほがらかになってみよう」。好機を逃してはならない。私たちは非常に愚かで、自分が「惨めになる機会」は、決して見逃さない。人々は、『心配事を探そう』と躍起になっている。同じことが、「幸福について」もなされるべきである。——もっとも、その幸福は、「魂の至福」の意味で、「財産や、地位や、知識が豊かになる」という意味では、当然ない。

だから、イエスは言う。「求めよ、そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」(マタイ7:7)と。その意味は、『神の国』『喜びの国』は、君たちの内面にあって、ただ発見されることをまっている」と言う。——それは今ここで、……待ち続けている。「誰でも、求めるものは受け、探す者は見つけ、門を叩く者は開かれる」(同8節)と。

その『門』は、私たちの孤独や、深刻さや、苦しみから解放してくれる「喜びの国」「新しい生命」の入口の『門』である。神さまとの結びつきに戻る『門』。放蕩息子が、父親の場所に戻る門である。その場所、門が、『今ここ』なのだ。又、こうも言えよう。「ほがらかである」とき、神は遠くの存在ではなくなる。「ほがらかであるとき」、『今ここでくつろいでいる』。『今ここ』にいる。『神の中』にいる』。

すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。

「狭い入口から入るように努めなさい。言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」。

「救われる者」とは、『神の中にくつろいでいる人』を指す。この『幸福』と『不幸』との境界線は、……実に「狭き門」「狭き入口」にある。「神との結びつき」を自覚するか、自覚しないかによって、『幸・不幸』が分かれる。——そのボーダーラインは、無限に狭い。それは単に、自覚するか、自覚しないかの二者選択だから、——無限に「狭い入口」なのだ。「神との結びつきの自覚」が、「神の国」の入口。

——現実的には、実に厳しい境界線である。神に目覚めないと、人間の生活が駄目になってしまう。そのような境界線である。「結びつきを自覚する」とき初めて、「物が見えている」とか、何か「聞こえている」とか、「物を感じている」ということは、個人の単独で起こっているのではなく、『神とのつながり』によって起こっている、……ということを知覚することができる。神によって生かされていると。

“今を見る”とき、先ず、自分自身の中に調和している。自分自身に調和しているとき初めて、周りのものと調和している。太陽と月と木々と小鳥たちと調和できる。ここには、二つの融合(調和)がある。一つ目は、自分自身に溶け込むこと、最初の融合だ。そして二つ目は、総なるものに溶け込むこと。

自覚的になりさえすれば、私たちは既に、「神の国」に入っていることに気づく。意識的、自覚的に“今を見れば”、人生は天国になる。——人生は詩になる。——音楽に、ハーモニーに、ひとつになる。

「あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。

そして人々は、東から西から、また南から来たから来て、神の国で宴会の席につく。

そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」。

私たちは“今を見て”天国に入らない限り、まったく無益で、空虚な人生を生きる。“今を見る”そのとき、エゴは消えている。トラブルメーカーはもういない。エゴが消えた瞬間、私たちは『神の国』にいる。普段私たちは、一つではなく、何千もの要素になっている。無数の群衆、雑音になっている。しかし、毎瞬間、“今を見れば”、調和、結晶化が生れる。ただの自覚だけで十二分だ。ハレルヤ！！

## ★分級への展開

### さんびしよう

\*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

36番

120番（改訂版）

### やってみよう

☆段ボールで狭い戸口と広い戸口を作ってみよう！

- ・ 1つは、適当な大きさの段ボール（広げるとハイハイで1人が入れる位の大きさ）を広げて、ガムテープで固定する。→狭い戸口
- ・ 1つは、大きめの段ボールを広げ、ガムテープで数枚つなげ、子どもが立って通れる広い戸口を作ってみる
- ・ できあがったら、広い戸口→狭い戸口の順にくぐってみる。広い戸口は2, 3人で通ると良い。

### 話してみよう

その1

- ・ 広い戸口は、簡単に入ることができましたか。どんな感じでしたか？  
（みんなで入ることができる、姿勢を変えずに入ることができる、楽に入れる etc）
- ・ 反対に狭い戸口はどうでしょう？どうやったら、入ることができたかな・  
（姿勢を低くする、1人で入る、何も持たないで入る etc）
- ・ イエス様は、「狭い戸口から入るよう努めなさい。」と言われます。どんな意味があるか  
みんなで話してみよう。（そのままでは入れない、自分を変える→悔いあらため）

その2

- ・ 順番抜かしされたことある（したことある）？それはどんな時？そしてどう思った？
- ・ 天国に入る順番があるとしたら、それはどうやって決まるんだろう？
- ・ 狭い戸口から入る生き方ってどんな生き方だと思う？